

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
318	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
<b>題名 (原題/訳)</b>	
<p>Moderate alcohol intake is associated with decreased risk of insulin resistance among individuals with vitamin D insufficiency.</p> <p>中等度のアルコール摂取はビタミン D 不足のヒトでのインスリン抵抗性進展の危険性を減少させることと関連する</p>	
<b>執筆者</b>	
Player MS, Mainous AG 3rd, King DE, Diaz VA, Everett CJ.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Nutrition. 26(1): 100-105 (2010)	
<b>キーワード</b>	
アルコール、中等度アルコール摂取、ビタミン D 不足、インスリン抵抗性、糖尿病	
<b>要 旨</b>	
<p><b>目的：</b> 低ビタミン D レベルとインスリン抵抗性の進展との関連が示されている。中等度のアルコール摂取が低ビタミン D レベルにおけるインスリン抵抗性を変化させるかどうか検討した。</p> <p><b>方法：</b> 本研究は 2001-2004 年の米国全国健康栄養調査で糖尿病、冠動脈疾患、脳卒中の既往のない 20 歳以上の対象者での横断的研究である。インスリン抵抗性指標 (HOMA-IR ; 2.6 以上) と空腹時インスリンレベル (12.2 □U/mL) を基にして中等度飲酒者とビタミン D 不足 (欠乏レベル 20 ng/mL、不足レベル 21-32 ng/mL、正常レベル 32 ng/mL 以上) の非飲酒者で測定されたインスリン抵抗性状態を解析した。</p> <p><b>結果：</b> 2721 人が解析対象の基準を満たした。これらの中で、34%がビタミン D 欠乏、47%がビタミン D 不足であった。正常ビタミン D レベルの中等度飲酒者と比較して、非飲酒者全体では HOMA-IR レベルで評価したインスリン抵抗性での危険性増加は認められなかった (オッズ比、1.18、95%信頼区間 0.61-2.30)。ビタミン D 欠乏者はアルコール摂取の有無に関わらず、インスリン抵抗性の危険性が高かった (中等度飲酒者オッズ比、2.12、95%信頼区間 1.41-3.19 ; 非飲酒者オッズ比 2.22、95%信頼区間 1.29-3.83)。しかし、ビタミン D 不足者では、中等度のアルコール摂取でインスリン抵抗性オッズ比の変化が見られ、正常ビタミン D レベルの中等度飲酒者で得られたオッズ比と差がなかった (オッズ比 1.29、95%信頼区間 0.92-1.80)。一方、ビタミン D 不足で非飲酒者ではインスリン抵抗性の危険性が増加していた (オッズ比 1.82、95%信頼区間 1.07-3.11)。同様の結果は、空腹時インスリンレベルを基にした解析でも確認された。</p> <p><b>結論：</b> ビタミン D 欠乏状態ではその効果は見られなかったが、中等度アルコール消費はビタミン D が不足しているヒトでインスリン抵抗性進展の危険性を低下させる効果があると考えられる。</p>	